九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

理想的身体技法としての武道 ： 武道・武術研究」への一視点

森山, 達矢
合氣万生道

https://doi.org/10.15017/2339069

出版情報：九州人類学会報. 32, pp.49-58, 2005-07-16. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

理想的身体技法としての武道 ―「武道・武術研究」への一視点―

森 山 達 矢 (合氣万生道)

1. はじめに

本稿では、合気道という武道を例にとり、「伝統的な身体技法」について論じる。具体的には、筆者の合気道の稽古を通じて得られた知見から、この身体技法についていくつかの論点を引き出す。このことを通じて、「近代的身体技法」と「伝統的身体技法」というこの二つの対立図式に対するコメントを行う。

はじめに、筆者が稽古をしている合気道から説明したいと思う。端的な事実を言うと、合気道は「伝統的な武道」ではなく、「近代武道」である。

合気道は、開祖植芝盛平(1883-1969)が、柔術・剣術・槍術などいくつかの武術を修行し、それらを自らが総合して創作された武道なのである。また植芝開祖は、敬虔な大本教の信者であった。そのため、合気道に特徴的なこととして、他の武道と比べると、より精神性・宗教性が重視されているということが挙げられる。また合気道に特徴的な点は、「試合」がないことである。これは、いたずらに勝敗を競うことは、修行の妨げになるという考えに基づいており、合気道は競技スポーツ(例えば、柔道)という道には進まず、精神修養を目的とした武道であることを端的に示しているものである。つまり、技の稽古は、合理的に相手(敵)を戦闘不能状態へと陥れる方法を身に付け

るという、武術一般にあるイメージとはまったく違っているものなのである。

合気道の稽古は、基本的に「型稽古」である。決まった型を何回も繰り返すことが、合気道の稽古の中心である。技をかける人（「取り」）とその技を受ける人（「受け」）が交互に技をかけあいながら、技を練り上げていく。柔道のように実戦・試合を想定した、お互いが自由に技を掛け合う「乱捕り」というものは、合気道にはない[1]。

また、特徴的なこととして、技が柔道ほど体系化されていないということが挙げられる。柔道の技は講道館が一元的に規定している。確かに、合気道では「合気会」[2]が技を規定しているが、合気道の技は、会派が違えば技も違い、また同じ会派でも指導者によってまったく違うこともある。例えば、「当身（あてみ）」[3]に対する考え方に典型的に表れる。例えば、「正面打ち」という手刀で相手の眉間を打つという決まった攻撃の方法がある。これについても、大きく振りかぶって打ち下ろす方法や下から摺り上げるようにして目標を打つあり方があり、さまざまである。当然、打ち込み方が違えば、後の技への入り方からすべて違ってくる。その違いは何に拠るのかと言うと、植芝開祖にいつ弟子として就いたかによって、技のあり方、説明の仕方が異なるといわれている。それは開祖は、技を体系化することはなく、稽古の際にも弟子達に何の説明も加えずただ技を実際に示すだけであったらしく[4]、また開祖が存命中も技のあり方を変化させていたからだといわれる。

このように見ると、スポーツの要件である、「競技化」「技の客観化」「合理化」という要素[5]は、合気道には見られない。そうした意味では、柔道は「近代スポーツ」といえるだろうが[6]、合気道というのは開祖によって発明された「近代武道」「現代武道」ではあるが、「近代スポーツ」ではない。だたし、強調しておきたいのは、近代に作られた武道だからといって、その身体技法が近代的なものであることを意味するというわけではない。合気道の身体技法は、伝統的な身体技法に根ざしている。経験から述べると、合気道を経験するまで培われた身体技法（これを近代的・西洋的な身体技法として捉えるのが妥当かどうかはわからないが）の延長線上に、合気道の身体技法はないということは間違いない。明らかに異なった身体技法なのである。

2．合氣万生道の稽古内容

これまで合気道の概略的な説明をしてきた。次に、筆者が実際に稽古をしている流派の説明をする。筆者が属しているのは、「合氣万生道」という会派である。この会派は、植芝開祖の弟子であった砂泊誠秀先生が開かれたものである。砂泊先生は、敬虔な大本教の信者の家に生まれ、その関係で戦前に植芝開祖に弟子入りされた。戦後まもなく熊本に「万生館」道場を開かれ九州を中心に合気道を伝えていた。もともと「合気会」に属していたが、開祖が亡くなられたのをきっかけとして、組織を離れて、独自に活動することになり、通称で「万生館合気道」と呼ばれるようになる。そして、平成 12 年に他の合気道の会派との違いをより明確にするため「合氣万生道」とその名前を変更することになった。

現在筆者が稽古を行っている道場は、福岡市内にある。週 4 回各 1 時間の稽古が行われている。稽古の内容は、はじめに神棚に向かい正座をし、一揖、二拝、二拍手、一拝、一揖という順番で礼拝を行い、次に開祖の御真影に向かい一揖、一拝、一揖の順で礼拝を行う。次に「合氣万生道の精神」[7]と「道歌」を稽古の参加者全員で唱える。その後に準備運動を行い、稽古に入る。稽古は参加人数によって二人一組でする場合と係り稽古の場合がある。係り稽古とは、一対多数になり稽古相手を連続して順番に変えていく稽古である。稽古内容は基本的に型稽古である。はじめに道場長が手本を見せ、技のポイントを説明して、その後に稽古生が技をかけあう。合氣万生道の稽古では、「呼吸力」という力を重視する。合氣万生道は、この呼吸力を習得するための稽古だともいえる。時間になると整理運動を行い、最後に礼拝をして稽古は終わる。稽古の後は、居残りで稽古をする人もいる。時間外の稽古では、通常の稽古とは異なり、自分達が課題にしていることをお互いに意見を出し合いながら、稽古を行うことが多い。

また、特別な稽古として毎月一回「有段者研修会」という稽古がある。これは、熊本にある本部道場で、砂泊先生自らが直接稽古を付けてくれるものである。現在砂泊先生はすでに 80 歳を越え

ており、普段稽古されることはない。そのため、この研修会には、九州各地の道場から毎回100人程度の道場生が集まる。この稽古で先生が強調されるのは、開祖の精神を言葉ではなく身体・技で伝えるということである。砂泊先生にとって開祖の精神とは次のことを指している。「武道とは、腕力や凶器をふるって、相手の人間を倒したり、戦争などで、世界を破壊に導くこと」ではなく、真の武道とは、「宇宙の氣をとらえ、世界の平和を守り、森羅万象を正しく生み、まもり育てること」である。そして万物は「むすび」で生成発展し、これが「天の理法」であり、天の理法とは陰と陽のむすびであり、自分の肉体と精神の一体であり、自分と相手とのむすびである。こうした「むすび」をわが心身の内で鍛錬することが、真の合気道である。

先生が強調されるのは、合気道は精神性が技として表されるということである。そうしたことを身をもって体現し、それを伝えていくというのが研修会の趣旨なのである。

研修会では、砂泊先生自らが技を参加者全員にかける。参加者は、順に先生の手を取りに行く。先生は手を取りにきた者を次々と簡単に投げる。実際に先生の手を取ったことがあるが、いとも簡単に投げられてしまう。実際に技を受けた感じは、やはり普通のものとは違った力を感じるのである。先生は、直接手を取らせ、「呼吸力」とはこういうものだということを教えている。先生は、技を教えることを目的としているのではなく、技を通じて開祖の精神を伝えようとしているのである[8]。そして「呼吸力」こそ合気道の心を体現したものだということを強調される。「呼吸力」がどういう力かを説明することは、非常に難しい。筆舌に尽くしがたいものであるし、単純に筆者自身がそれを体現できるレベルにまで到達していないからと言うこともできる。どういう感じかをあえて言うなら、受ける場合は明らかに筋肉を使った力ではない別の力ということは言えるし、気が付いたら倒されているという感じであり、取りでできたときの感覚は、ほとんど力を入れていないのに相手が勝手に浮き上がる感じで、すっと身体が透明になる感じである。

砂泊先生は、「呼吸力」を次のように説明する。呼吸の調和が取れているときが安定しているであり、その安定した状態から力が出たとき、真の強さが出る。しかし、相手を意識したとき安定を失う。すべてを任せきる気持ちにならないと呼吸力は出ない。呼吸力は、体力的な力ではなく、心の世界が相手と一体になる気持ち、万有と一つになる気持ち、むすびの心にならない限り発揮できないものである。相手を体力で倒そう、やっつけてやろうと思う心からは呼吸力はでない。相手と一体になろうとする素直な心があって初めて力が抜ける。力が抜けないと、相手の中に自分の力は流れない。相手の中に流れる力が呼吸力なのである。

合氣万生道では、普段の稽古や研修会に関わらず強調されるのは、「むすび」「（相手を）捉える」「相手と一体になる」「敵を無くす」ということである。砂泊先生が研修会でよく話される言葉に、「無敵と言うことは、肉体的に誰よりも強くなることではなくて、決して敵を作らないようにすることなのです。このことを言葉ではなく、体的なものとして現して、伝えていくのです。」入門当初、砂泊先生や道場長の話は、言葉の上では理解をしていた（「君子危うきに近寄らず」ということだろうと）。同じような講釈は、宮本武蔵で聞いたことがあったからである。

しかし実際に稽古を積み重ねていくにつれて、このことを認識のレベルではなく、パフォーマティヴな次元で理解できるようになった。砂泊先生や道場長の話される話の内容は、武道的身体運用を習得する上で非常に重要なものである。どういうことかと言うと、実際に技を受けると分かるのだが、先生に投げてもらうと、「嫌な感じ」が起きることはない。自然に身体が投げられるような感じがし、無理やり投げられるという感じは起きないのである。力ずくで投げられると無理やりで「嫌な感じ」が起きる（無理やり引っ張られると誰でも本能的に身体が嫌がるだろう）。この「嫌な感じ」というのは、相手に対する「敵愾心」に近い感情である。その「嫌な感じ」を相手に起こさせないような技、つまり「敵愾心」を催させないような技を練習するのである。

この「嫌な感じ」（敵愾心）を相手に持たせないということは、普段の稽古の中で重要な指針となっている。技の良し悪しの規準は、この「嫌な感じ」を持ったか持たなかったか、抵抗感なく身体の重心が崩されたかどうかである[9]。こうしたこと

が稽古の中心となっているため合氣万生道は、経験者にとっては武道の稽古の最後の形態はこうなるのだろうということを理解する[10]が、経験のない人が見るといったい何を稽古しているのかがさっぱり分からないものとなっている。

3．武道的身体技法の習得ー身体感覚を磨く

道場に通い始めて一番初めに言われたことは、とにかく力を抜くことである。そして一般的に善しとされている「気をつけ」の姿勢は、武道的には最悪だということである。技術的なことを言えば、この姿勢は肩の稼動範囲を制限しているからだ。筆者自身も初心者に対し教えるときに強調することは、これまで覚えてきた体の動かし方とはまったく違う動きをわざわざ練習しているということである。先に示したように、合気道の稽古は「型稽古」が中心である。そして先輩からは型稽古について、「型を何も考えずに何万回やったところで絶対に上手くならん。いろんなことを考えながら稽古せんと絶対に上手くならんよ」といわれたことがある。

ところで「伝統的身体の復権」という言説は、最近よく聞くところである。その最も有力な理論家として、斉藤孝がいる。伝統的な身体文化を「肚腰文化」と名付けて、戦後急速に伝統的な身体文化が消滅していくことに危機感をもち、その復権を強く訴えている。斉藤が強調したいことは、伝統的身体の回復というよりも、「身体感覚を磨く」ということのほうである。「身体感覚を磨く」ということにおいて、伝統的な身体運用（肚腰文化）は非常に優れていたのではないか、だから伝統的に身体運用に目を向けてみる必要があると主張しているのである。

斉藤の主張は、武道を志している筆者にとって、よく理解できるものである。武道を稽古してよくわかるのは、身体感覚を研ぎ澄ますということにおいて、武道は非常に優れたシステムだということである。それでは、スポーツでは身体感覚が磨けないかというと、言うまでもなく、それは違う。スポーツの上達においても身体感覚は重要な要素である。ただ武道のほうは、稽古体系が身体の感覚が最大限になるように組み立てられているということである。

実際に合気道の稽古を始めて感じるのは、自分の身体に対する感度が向上したことだ。稽古ではとにかく身体の力を抜くこと、力を入れないことが強調される。そのような稽古を積み重ねていくとどうなるかというと、相手の身体のどの辺りに力が入っているだとか、自分のどの部分に力が入っているかがはっきりと分かるようになる。その結果、ハラのどのあたり、腰のどの辺りなど、身体を細かく感じることが出来るようになった。例えば、普通人は肩であれば、首から胸までの間の部位を一纏りとして体感しているだろう。感度を上げるということは、肩甲骨、鎖骨、肩関節、背骨、それらを取り巻く筋肉、それら一つ一つを感じるということであり、それらを動かすときどれがどのように動いたかを感得するということである。また身体感覚というのは、自分の身体や接触している相手の身体まで感じるということだけでなく、触れていない相手との「間合い」といった空間の認知や時間の流れをも感じる能力も含まれる。身体の感覚を磨くということは、武道においては非常に重要なことなのである。先にあげた先輩の発言は、こうしたことを意味しているのである。

話は脇にそれるが、報告者は合気道と並行して、稽古の参考になるかと思い（陳氏）太極拳を学んでいたこともある。実際に稽古をしてみて、確かに似たような技があり、似たような動きをすることが多かったし、非常に参考になった。しかし、武術的に決定的な違いがあったのだが、それは重心の位置が微妙に違うということである。太極拳の重心は、合気道と比べると、やや後ろ気味にある。重心の位置が違えば、当然一つ一つの動きの「質」がまったく違ってくる。重心の位置の違いは、見た目には同じに見えるかもしれないが、武術的には非常に大きな違いである。武術的な動きは、見たとおりの型をそのまま行えば、誰でも同じようにできるというわけではない。武術の稽古は、誰もが同じようにやれば同じぐらいに上達するというようなものではないし、それほどシステマティックに出来ているわけではない[11]。武術の動きは、非常に精妙にできており、状況における身体の位置、足の位置、肘・膝の曲り具合、重心の位置が微妙に違うだけで、技がスムーズにできたり出来なかったりする。そのため、稽古中修行

者は型ばかりではなく、自分の身体の状態・感覚、心の状態に最大限の配慮を払う。武術的な動きは、見た目ほど簡単に出来るわけではなし、同じようにやっていると見えるかもしれないが、当人自身の感覚からするとまったく違うからだの動かし方をしていることもある。

武道の稽古では、自分の身体に対して最大の注意と「配慮」(「自己への配慮」)が必要であり、感覚が磨かれる分だけ、他の武道との同質的なところや相違点が感得できるようになる。

前節の最後の部分との関連で言えば、結局相手に敵愾心を与えないような技を行うために、身体感覚をお互いに磨きあいながら、稽古を積み重ねていくのである。つまり稽古生は、砂泊先生の「むすぶ」「一体となる」「敵をなくす」という言葉をレファレンス・フレームとして、武道的身体を習得していくのである[12]。

4. 理想的身体技法ー稽古者からの視点

報告者の日常的な経験からして、「武道」を修行している人は、「武道」と何とを対立的に考えているかと言うと、やはり「スポーツ」である。稽古中に身体の動かし方を説明するとき、対比的に用いられるのはスポーツ的な身体技法である。稽古におけるこの対比的な説明のありかたは、武道的な動きを印象付けるため普段よく使われる。ただし、この対比的な説明は「近代的身体技法対伝統的身体技法」という意味を含んでいるかというと、多少その意味がある[13]が、この場合の多くは、武道的身体運用と「日常的身体運用」との違いを強調するために持ち出される。スポーツ的身体技法というものを日常的身体運用の延長線上にあると捉えている。そして、武道的な動きとは、スポーツとは違うからだの動かし方であり、日常的な動きとはまったく異質な身体の使い方というように捉えられている。つまり、武道を修行している者の意味世界では、「日常的身体運用=スポーツ的身体技法」対「武道=非日常的身体運用・非スポーツ的身体技法・異質的身体技法」となっているのである。そして、武道的身体技法のことを、「理想的な体の動かし方」というように説明している。つまり、必ずしも武道的身体=伝統的身体というようには意味づけされていないのである。

この場合、理想的な体の動かし方というのは、力み無く力を使うということ、効率的な力の出し方、無駄なく力を相手に伝えるといったことを意味している。筆者が、稽古の中で初心者に対してよく手解きとして行うことがある。杖という120ｃｍ程度の細長い棒状の武具を使って、互いに押し合う。そして、普通の体の動かし方で押した場合と、武道的な体の動かし方で押した場合とで押された感じがどう違うかを相手に体感してもらう。このような実技を行って、初心者に対して武道的な身体の使い方と普段の身体の使い方との違いを説明するのである。そのようにして、日常的な体の動かし方というのは、無理や無駄の多い動作なのだということ、武道的な動作というのは非常に合理的なものだということを印象付けるのである。そして、武道的な動作というのは、物が簡単に動かせるようになるとか合理的に動くことになるから、疲れにくくなるというように普段の生活においても役に立つということを言って、稽古生の興味を高めてもらうことがある。

また、合気道の特殊性を説明するとき引き合いに出すのが、柔道である。一般的に柔道は武道に分類されるが、合気道家の間では、柔道はスポーツであるという理解がなされている。それは、柔道が階級に分類され「競技化」されているからという理由からではない。柔道の競技を見れば分かるが、力と力がぶつかり合っている。これは、技術が同じレベルであれば、最終的に勝負を決めるのは「筋力の差」ということになる。つまり、結果的にはどれだけ筋肉をつけているかで勝負が決まってしまう。稽古生の中では、こうした力と力のぶつかり合いで、結局筋肉の量で強弱が決められてしまうようなあり方を「スポーツ」と考えているのである[14]。スポーツは、身体を各パーツに分解し、そこを個別的に集中して鍛え上げていけば、それでよしという考えに基づいていると理解されている。これに対して、武道は自分の身体をトータルなものと考え、各身体部に力は無くても全体を調和させて動かすことができれば、大きな力を生み出すことができるものだというに理解されている。合気道においては、力と力がぶつかり合うことを避ける。ぶつかった場合結局勝つのは、力のあるほうだ。合気道においては、相手の力とぶつからずに「受け流す」とか「吸収する」という

ことが言われる。先に述べた、敵愾心を無くすということもこのことと関連してくる。力と力がぶつかった場合、互いに「なんとかしてやろう」という気持ちが沸き起こる。そうしき気持ちを起こさせないように（「敵を無くす」ということを指針として）稽古で身体を練り上げ、理想的な身体の動作法を身に付けていくのである。

武道とナショナリティの関連についてだが、確かにこれは否定できない。稽古のとき動きを説明するとき、西洋との対比で説明したりすることは、よくあるし、例えばナンバの動きや剣の説明するとき、農耕民族の日本人にあった身体運用であるといったようなことを話すことが多い。また、合気道の所作の一つ一つが合理的に構成されているため、「正座」一つとってみても稽古しながら「日本人」であるというか、日本の文化で生まれて育ってきたのだなという気持ちはよく起こる。また、「スポーツ」批判が、横滑りして「西洋的」な考え方を否定的にとらえることもよくある。それは、西洋的な思考は押すか引くかであり、力がぶつかった場合、力の強いほうが弱いほうを一方的に屈服させる考え方であるといったように。

それでは、稽古生はスポーツをまったく省みないかと言うとそうではない。稽古をしている者が何を考えているかというと、ほとんどは自分の技の向上のことである。稽古生の中ではしばしば、一流のアスリートの体の動かし方について意見を述べ合うこともある。例えば、「イチローがバッターボックスに入って構える前の肩の位置は参考になったよ」とか「一流のサッカー選手は、上体のバランスがまったくブレないよね」といったようなことが話されたりする。稽古の参考、技の参考・向上に繋がるとなれば、他の武道、太極拳、スポーツやダンスの動きを取り入れたりする。そこは洋の東西は関係ない。また、一流のアスリートが、どのようなことを考え、どのような練習をしたか、どのような課題に、どのように取り組んだのかそうしたことも、稽古生達の話題の種になり、精神的な糧となるのである。極端な話、武道的な意識（＝常に向上心を持つという意識）を持っているアスリートのことを、「武道家」と呼んだりするのである。武道の目標は、自分の技の向上であるし、自己の追及であるし、自己完成なのである。非常に主観的な立場でいうと、武道におけるナショナリティの占める大きさは、そこまでは大きくはないといえる。

最後に「近代スポーツ」と「伝統スポーツ」という対立図式について、コメントしておきたい。「武道」＝「伝統スポーツ」という考え方には、個人的な考えを言えばなにかしら納得し得ないものがある。単純に言うと、「武道」と「スポーツ」は、とりあえず別のカテゴリーである。少なくとも武道をやっている人は、そう思っている人が多い。伝統スポーツといった場合、「ある地域の昔からある身体を使った遊び」という意味である。このような意味で対応するのは、「蹴鞠」「百人一首」といったところだろうか。

スポーツは娯楽性を含み、基本的に勝敗を競うものであり、武道はそうではない（すべてそうとはいえないが）。武道の目標は、己の技の向上にあり、いたずらに勝ち負けを競うことは、技の向上に関してマイナスに働くと考えられている。そもそも志向するものが違っているのである。武道を修行している人間にとっては、武道は「武道」であって、それ以外のなにものでもないとおもっている人のほうが多いのではないだろうか。

「武道」＝「伝統スポーツ」という図式は、研究者が作り上げたものではないか。研究者の立場から見たら、武道は「創られた伝統」かもしれないが、武道を修行しているものからからすると、そのような議論はあまり意味を成さない。伝統スポーツという概念は、武道にとっては「カテゴリーエラー」なのである。「武道」を近代スポーツ対伝統スポーツというような枠組みで捉えてしまうと、見損ねてしまうことが非常に大きいということである[15]。結局、ここで見られるのは、スポーツという視角からみた武道であり、それは結局研究者が西洋というレンズを通して武道を見るという、どこかで見た図式と同じようなものである[16]。

5．おわりに

これまで合気道を例に取り、武道の身体技法を巡るいくつかの問題について議論してきた。「近代と伝統」、「西洋と日本」という対立図式に関しては、稽古人の立場からすると、それはあまり意味を成さない。

先に述べたように、武道的身体技法は、稽古人

にとって「伝統的身体技法」ではなく、「非日常的身体技法」であり、「理想的身体技法」なのである。なぜ合気道に入門したのかを聞いても、「日本の伝統文化を学ぶために」という答えは返ってこない。圧倒的に多いのは、「なんとなく武道をやりたかったから」ということである。入門してから混乱するのは、「力を出すために力を抜く」とか「身体を調和させて動かす」というように、これまでとはまったく逆のことをしなければならないということである。そこで強く意識されるのは、「日常的身体技法と非日常的身体技法」という対立である。そしてさらに強調されるのは、「非日常的身体技法の日常化」である。つまり、非日常的身体技法=理想的身体技法を道場の中だけでなく、普段の生活においても行えるようにし、そうするためには常に身体の姿勢から内部まで観察していなければならないということである。

こうしたことはある種の「規律=訓練」だという意見があるかもしれない。しかし、規律訓練は、なにかしらの恣意的に設定された規範・基準があって、それに無理に身体をはめ込んでいく訓練である。この近代的身体の構築は、社会全体的な合理性と結びついているのである。それに対し、理想的身体技法の構築は、疲れにくくなるとか簡単に物を動かすことができるようになるといった自分自身の合理性と結びつく。武道は外部の基準に自らを合わせるものではなく、自らの基準を自ら作り、その理想と思われる状態になろうと努力するものである。究極的には、武道はなにものからも捉われない自由な身体を目指すものである。

「身体は社会的に構築されたものである。」「身体は権力によって貫かれている。」こうしたテーゼは、今となっては反論の余地がないほど常識化している。

確かに合気道の稽古をしながら、このテーゼはまったく正しいと体感することがよくある。

合気道の稽古では、「脱力」が強調される。とにかく身体の力を抜く。長年稽古をしていると自然に力が抜けてくるのだが、当然新人は緊張のせいもあるだろうが身体が硬い。特にサラリーマンの新加入者と一緒に稽古をすると分かるが、多くのサラリーマンは体が本当に硬いのである。そして姿勢を正しくしてくださいといった場合、やはり小学生のときに習った背筋を伸ばして胸を張った「気をつけ」の姿勢をとる。こうしたことを経験すると、フーコーの「規律・訓練された身体」というのは、こういうものなのかと思わず納得してしまう。

個人的な経験を思い返してみると、自分にとって重大な事実は「規律訓練された身体」でない身体もあるのだと思ったことである。確かに身体は社会的に構築されるが、いったん構築されたものは変更不可能ではなく、変更可能なものでもあるのだ。武道は、個人がこれまで持っているまったく違う身体運用を身に付けさせることにより、武道は身体とは多元的・複数的なものなのだということを気づかせてくれるものだ。いうなれば、「自己差異化」の手段であり、方法なのである。自身合気道の高段者である内田樹は次のように言う。「フーコーの言う「標準化された身体」が、リズミカルに、斉一的に動く身体であるとするならば、まさしくその正反対の「全身がアナーキーかつ群雄割拠的に自律する」身体を作り上げるのが武道の狙い」なのである[17]。

武道は身体感覚を高めることを必要とするということ、そして武道の目標は、理想的身体技法を体得しようとすることによって、自己を向上させ、自己の完成へと至ることなのだ。これらのことをまとめていうなら、武道の目的は、常に自分自身へ配慮することで、人間のポテンシャルを最大に引き出すことといえるだろう。しかし、武道の最終的な目標地点は、そこではない。これ以上は、理論的に説明ができないところだが、個人的な経験を述べてから、最終的な結論を申し上げたい。

砂泊先生は、「相手とむすぶ」「天地と一体になる」と常に言われている。入門した当初何を言っているのかが理解できなかった。しかし、稽古を積んだこともあろうが、最近合気道の稽古をしていて、何百（千？）回に一回ぐらいの割合で、完全に力が抜けて、何の思考もなく、体が勝手に動いている感覚がある。そのときは、まったくの思考はないけれども、相手が何をしてくるか、それに対して体の行くべき場所、立つ位置、体の動かし方が直感的に分かる。というよりも、操られているような感じがする。私が私でなくなるという感じというべきだろうか。このような感覚が「天地と一体になる」ということであると断言することは憚られるが、おそらくこうしたものなのだろ

うという直感はある。

繰り返し言うが、武道の稽古は、自分の身体感覚を最大限まで発揮し、身体を微分化し、徹底的に自己を統治（ガバメント）しようとする。それは、現代資本主義が要請するような悲劇的なセルフマネジメント[18]では決してない。このような徹底した自分の自己への関り、「自己への配慮」の先に出会うは、「自分」ではなく、自分ではないものである。つまり、徹底した自己探求の先には「他者」が待ってくれているのである。私が私でありながら、私でないものを同時に経験すること。「私は私である」というトートロジーからその彼岸である「未知なる次元」へ跳躍できる地点に、武道の本当の快楽があるのではないかと思っている。

注

1) 乱捕りや試合を行う合気道の流派もある。そうした流派は少数派である。
2) 「合気会」とは、合気道団体の中で日本のなかで最大の組織である。合気道の団体には他に、「養神館」、「気の研究会」、「合気道協会」がある。これらは、開祖の高弟であった師範たちが合気会から独立して設立したものである。
3) 相手の身体に対する主として拳を使った攻撃。簡単に言うとボクシングでいう「パンチ」であるが、武術的には身体のどの部分を使っても「当身」と呼ぶことが多い。
4) 柔道の創始者である嘉納治五郎が、従来の柔術の原理を近代科学・合理性に基づいて分析し柔道をつくり、その技に科学的・合理的な説明を加えたのに対して、植芝盛平開祖は「天地と一体になれ」といった宗教的な説明しかしなかったといわれている。合理的な説明がされなかったために、技の独自の解釈が可能になったと思われ、そのため多様な技のあり方が出てきたものと考えられる。
5) グットマンは、近代スポーツの特質として「世俗性」「平等性」「官僚化」「専門化」「合理化」「数値化」「記録への固執」の 5 つを挙げている。
6) 井上俊は、『武道の誕生』の中で、「柔道」の歴史を顧みながら、「武道は古来の伝統文化ではなく、明治中期以降に武術や武芸が「近代化」される過程で形成された近代文化である」（p.189）と述べている。また柔道が戦後、GHQの政策からその生き残りを図るために、スポーツ化せざるを得なかった歴史的な要因を説明している。似た指摘として、内田（2004）論文がある。
7) 次の文章を合唱する。「合気とは愛なり。天地の心を以って我が心とし、万有愛護の大精神を以って自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ。合気とは自己に打ち克ち敵をして戦う心無からしむ。否、敵そのものを無くする絶対的自己完成の道なり。而して武技は天の理法を体に移し霊肉一体の至上境に至る業であり、道程である。」これは、砂泊先生が開祖から聞いた言葉で、先生自身が合気道の精神だと思われるものをつなぎ合わせて作られたものである。
8) 筆者が興味深く思うのは、精神性が技を作り出すということである。逆に言うと、技は精神性の表れと言うことである。先に、合気道は会派や指導者によっても技が異なると述べたが、これを個体的な身体的な差異に還元するのではなく「思想性の違いが技・身体技法の違いを生む」ということは考えられないだろうか。こうしたことは、身体をめぐる問題に新たな視角をもたらすものではないかと考えている。実際に、合気会と合氣万生道とで同じ技をかけてもらったことがあるが、こうも違うものかと思ったことがある。
9) こうした意味でも、近代スポーツに見られる技の「客観化」というのは意味をなさない。合気道の技は、表面に現れたもの・結果が重要ではない。技を奇麗に出すことができても、それが力ずくであったりすると、それは善しとはされない。重要なのはあくまでも「感覚」なのであり、それは技を掛ける側と受ける側の体内感覚・経験でしか確認することはできない。
10) 他の流派から来た人が、「武道の稽古は最終的には、この（合氣万生道）ような稽古になると思いますし、こうした稽古をしたかったんですよ」ということを言っている。
11) 合気道と太極拳を比べてみると、指導者の個性という要因もあるだろうが、稽古のシステムとしては太極拳のほうが、より合理的であるよ

うに思えた。合気道の場合、抽象的な言葉で説明されることが多い。ただ共通しているのは、どちらとも「型」が大事なのではなく、身体内部の感覚のほうが重要ということである。どちらの指導者からも、「型は教えることはできるけれども、感覚は自分でつかむしかない」と同じようなことを教示された。

12) 倉島（2002）は、武術的身体技法の習得過程における「精神性の強調」が果たす機能を否定的にとらえている。倉島は、彼の武術の先生の教えから、精神性の強調や根性主義は身体感覚を抑圧する方向に働くということを主張している。「根性主義」については同意できるが、これまで論じてきたように、必ずしも「精神性の強調」と「身体感覚」は互いに排除しあうものとは考えられないといえるだろう。また、砂泊先生の言う「むすぶ」とか「一体になる」という言葉は、倉島の言う「線」の感覚（「良い練習」を実現するもの）に近いとも言えるし、生田の「わざ」言語にも近いとも言える。

13) 道場生の多くにとって、現在の日本の身体運用が古来のものと違っており、明治以降に西洋から導入されたものだということはほとんど常識のものとなっている。そうした知識は、普段の稽古の中で新人・後輩にインフォーマルに伝達されていく。

14) ある道場の先輩は、「オリンピックの柔道の試合を見てもぜんぜんツマラン。技術も理合いもへったくれない。後ろに引いただけで、「注意」が出されるわけだから、あれは武道でもなんでもない」ということを言っている。

15) グットマンは『スポーツと帝国』のなかで、近代スポーツが伝播していく過程を植民地主義の別の側面であるとし、ヘゲモニー概念で分析することを主張している。そのなかで「近代スポーツは伝統的スポーツを駆逐してきた」といい、日本における例として、柔道と相撲を挙げている。筆者が主張したいのは、こうした視座からではない武道に対するアプローチの仕方である。

16) 日下と野崎は、「スポーツ身体論」というテーマ、すなわち「スポーツにおける身体」「スポーツする身体」の問題は、未開発の分野と言い、スポーツ的身体に対する暫定的な分析枠を提示している。その中で、スポーツにおける身体は、武道に見られる「日常的身体図式の解体と組み立てなおし」「感覚と身体の組みなおし」という論理と適合するかという問いを提出している。個人的な経験から言うと、両者は適合するだろうというのが答えである。ただし、一部のプレイヤーにとってという限定が付くが。

17) 内田樹　『私の身体は頭がいいー非中枢的身体論』新曜社 2003、p.48
フーコーに関して言うと、筆者の個人的な見解をのべるならば、後期の概念である「生存の技法」や「実存の美学」といった概念は、武道の思想と類似性があると考えている。

18) 森真一　『自己コントロールの檻　―感情マネジメント社会の現実』講談社メチエ、2000

参考文献

アイヒベルク、H　1997　『身体文化のイマジネーション――デンマークにおける身体知』（清水論訳）新評論社

生田久美子　1987　『「わざ」から知る』東京大学出版会

井上俊　2004　『武道の誕生』吉川弘文館

内田樹　2003　『私の身体は頭がいいー非中枢的身体論』新曜社

河野亮仙　1999　「舞踊・武術・宗教儀礼――芸能と祭りの身体論へ」、野村・市川編『技術としての身体』、p.202-p.228、大修館書店

日下裕弘・野崎武司　2004　「スポーツ身体論序説」、『スポーツ社会学研究』第 12 巻、p.15-p.24、法政大学出版局

グットマン、A　1997　『スポーツと帝国――近代スポーツと文化帝国主義』（谷川他訳）昭和堂

倉島哲　2002　「武術教室における身体技法の習得――「線」の感覚を手がかりに」、田辺・松田編『日常的実践のエスノグラフィ』p.142-p.167、世界思想社
斉藤孝　2000　『身体感覚を取り戻す―腰・ハラ文化の再生』NHKブックス
高岡英夫　2002　『究極の身体』ディレクト・システム社
田辺繁治　2003　『生き方の人類学　―実践とは何か』講談社現代新書
フーコー、M　1986　『快楽の活用―性の歴史Ⅱ』（田村淑訳）新潮社
ブレイク、A　2001　『ボディ・ランゲージ――現代スポーツ文化論』（橋本純一訳）日本エディタースクール出版部
森真一　2000　『自己コントロールの檻　―感情マネジメント社会の現実』講談社メチエ